

いたまま死亡することであった。

平安中期以降の文学作品には、齋王経験者を「罪深い」とする例が散見される。例えば、『源氏物語』（若菜下）では、六条御息所の死霊が前齋宮の娘に対し「齋宮におはしましたころほひの御罪輕むべからむ功德のことを、かならずさせたまへ」と忠告する。そして、『源氏』に出てくる前齋王の多くは、罪を償うために出家を望むのであった。実際の齋王経験者の中にも、比率として決して高くはないものの複数の出家者が存在している。

齋王経験者が負うこうした仏教的罪業は、齋王就任を拒む風潮へと繋がっていく。

おわりに

本報告では、齋王の仏教忌避が日常的なものである点で極めて特殊であったことを明らかにした。その上で、仏への信仰が基盤となり、数量主義的信仰態度を評価した平安中期、齋王が功德を積み重ねる存在として苦悩し、「罪深い」齋王觀の発生から齋王への就任を忌避する風潮が生じたことについて検証した。

今後は、こうした齋王への悪印象が、同時期に生じた齋王制度形態化と如何に関連しているのかを考察していきたい。

## 光明皇后による施薬院の草創とその思想

岩本 健寿

光明皇后による施薬・悲田両院の設置は、仏教に対する彼女の篤信や慈悲深さを物語るものとして名高く、後に彼女への信仰を派生させる一つの要因にもなった。しかし、両院に関する史料は極めて乏しく、結果的に、その設置理由については、光明皇后の慈悲心に関係させるかたちでしか語られることがない。そこで、本報告では、以上のように理解される傾向にある施薬院設置について、同じく光明皇后が深く関与した興福寺施薬院の史料を用いつつ、また、従来考慮されてこなかった天平二年（七三〇）という年次に着目して、検討を試みた。ただし、悲田院に言及する史料が更に少なくするため、考察対象を施薬院に限った。

光明皇后の皇后宮職下に施薬院が設置されたことは、『続日本紀』天平二年四月辛未条に確認できるものの、設置理由は記されていない。一方、『同』天平宝字元年（七五七）十二月辛亥条では興福寺施薬院への田地施入のことが記され（興福寺施薬院が六国史に記されるのは本条のみである）、願文には「福田」という語が使用されている。これ故に、従来、施薬院は、興福寺のものであれ、皇后宮職下のものであれ、光明皇后が仏教の福田思想を基にして社会的

「弱者」を救済するために設置されたと理解されてきた。

ところが、この理解は、福田思想への誤解に基づく。そもそも、福田思想とは、仏に施すことにより、施した側への招福を願う仏教思想である（時代が下ると施しの対象も拡大した）。すなわち、施しは、福田思想では、目的ではなく、招福の手段なのであり、従来の研究は目的と手段とを混同していたということになる。

そこで、あらためて『続日本紀』天平宝字元年二月辛亥条を検討すると、本条は、直前の同年一月壬寅条と非常に酷似した記載形式であることに気づく。そして、その一月壬寅条は、東大寺唐禅院への田地施入のことを記すため、福田思想を用いると、続く二月辛亥条と対にして理解することが可能となる（これについては別稿で詳論する）。すなわち、両条は、当時の王権による福田思想の実践を示すものとして解釈することができるのである。

さて、そのように理解できる両条では、史料に明記されるように、天平勝宝八歳（七五六）に没した聖武太上天皇の冥福、天平宝字元年当時の政権の安泰、及び衆庶の息災が、福田思想に依拠しながら祈念されている。当然ながら、これらが祈念されるのは、聖武太上天皇没後に政変が相次ぐなど、政権の不安定さが露呈していたためだろう。結果的に、この事例からは、光明皇后が、近親者の冥福と政治体制の安定的持続とを祈念し、以て政権の不安定性を補完するために福田思想を利用したことが読みとれるのである。このような光明皇后による福田思想利用のあり方は、興福寺施薬院が、光

明皇后の実父藤原不比等の冥福を祈るために養老七年（七二三）に建立されたとする先行研究にも通ずるものである。

以上のことを踏まえると、皇后宮職下へ施薬院が設置された天平二年の直前の政治状況が注目されてくる。具体的には、神亀五年（七二八）における皇太子某王夭折と、翌天平元年における長屋王の変勃発・光明子立后である。すなわち、皇后宮職下への施薬院創設の直前に、光明皇后の周辺では、近親者の物故と、長屋王の変に代表されるような政治体制の激しい動揺とが相次いで起こっているのである。このような社会状況は、まさに、興福寺施薬院が六国史に唯一記される天平宝字元年のそれに近いものといえる。この結果、それらの出来事を背景として、皇后宮職下へ施薬院が設置されたと強く推すことが可能となるのである。

このように、直接的な史料はないものの、『続日本紀』天平宝字元年一月壬寅・二月辛亥両条を参考にしつつ、天平二年という時期に着目するならば、施薬院が、単に光明皇后の慈悲深さのみによつて設置されたものではないことに気づくだろう。すなわち、光明皇后は、近親者の他界と政権の動揺とを背景にして、仏教の福田思想に基づきながら施薬院を設置したのである。そして、そこで祈念されたであろう近親者の冥福と政権の安定的継続ということこそ、天平二年という時期に施薬院が設置された目的であったと思われる。別の言い方をすれば、施薬院は、それらを実現するために、福田思想の具体的実践装置として設置されたと位置づけられるので

ある。

なお、本報告に光明皇后への信仰や彼女の慈悲心を否定する意図はない。むしろ、彼女が、数ある福田のなかから病者・貧窮者の救済を選択した部分にこそ、彼女の「慈悲深さ」の一端が垣間見えるように思えるのである。

## 徳川家康の駿府外交体制

張 慧 珍

家康の外交に関する研究は幅広く行われているが、本報告は、先行研究を踏まえて家康の日明講和交渉と朱印船制度設置、浦賀開港交渉の相関関係を明らかにし、家康の駿府外交体制の実態を検討したものである。特に浦賀開港は東西世界を結ぶ、新しい貿易・外交の体制であることに注目し、また家康の日明講和交渉・朱印船制度設置・浦賀開港交渉がほぼ同時期に行われていたことに注目すべきである。

一六〇〇年家康は明に対し「金印勘合」を要求した。金印は日本国王を、勘合は公貿易を示唆している。一六一〇年に勘合復活（日明講和）を要求し、福建商船が長崎を貿易港に來航することを求めた。また同年明より「勘合之符」を賜れば、日本よりそれを持たせ

て「大使船」を派遣する、その他の商船には「印書」、異国渡海朱印状を持たせると、勘合復活を要求した。これらの交渉は日本と中国が対等な関係にあり、勘合と朱印状を同列に位置づけていることが表れている。一六一四年琉球国王尚寧を通じて日明関係の三つの案を提示してそのうちの一つを受け入れることを求めたが、琉球は明が一切拒否したと、翌年薩摩藩を通じて幕府に伝えた。家康が勘合と並行して朱印状を扱っているが、一六〇一年安南商船が日本船渡航を希望したところ、同年家康が異国に渡航する日本商船は書印を証拠とし、無印の船に商売を許可しないほしいという朱印船制度を提案したのが始まりである。同年家康はルソンとの通商をはかった。

一五九六年スペイン船サン＝フェリペ号が土佐国浦戸に漂着したことをきっかけに、日本側はサン＝フェリペ号の航海図を写し、ルソンとメキシコを結ぶ関東の東方海上の航路がわかった。またサン＝フェリペ号に乗船していた修道士フライ＝ヘロニモ＝デ＝ヘススが秀吉の死後、家康の家臣を通じてスペイン王がメキシコとペルーの領土を持つていることと、スペイン人と友好関係を結べば家康に有益であることを伝えた。この情報から家康はスペイン人との浦賀開港交渉を本格的に展開したと考えられる。一六〇一年家康は長崎代官寺沢広高に命じ、フランシスコ派ヘスを遣わしてルソン総督に朱印船貿易と、メキシコ（濃民数般）との通交を求め、翌年にはメキシコとの交隣の仲介を依頼した。こうして一六〇四年堺に